

中国文学史

中国文学史

吉川幸次郎 述
黒川洋一 編

岩波書店

中国文学史

昭和四十九年十月九日 第一刷発行 ©

定価千六百円

著者 吉川幸次郎 述

黒川洋一 編

発行者 岩波雄二郎

東京都千代田区一ツ橋二丁目五番五号

発行者 岩波書店

三陽社印刷・青木製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

序

吉川幸次郎

黒川洋一君は、奇特の人である。中国の語でいえば、独行の人である。人のやらないことを、人の知らぬ間にやりとげて、人の知ることを求めない。私とは、昭和二十二年の春、私が京都大学文学部の中国文学の教師となり、黒川君また恰かも新入学生であって以来の、交誼である。

昨年のある日、突然の来訪を受け、うずだかい原稿の山が、私の前に積まれた。これはあのころの先生の文学史の講義のノートを整理したものです。私には役に立ちつつづけています。お礼の印までに、これは副本ですが、先生にさしあげます。

私は目を見はり、あっけにとられた。そうして何ともあなたは奇特な人だといった。

あっけにとられることしばらく、この友人の好意にむくいたく思った。そうしてその方法として、これを本にしてはと考えるようになった。

私は中国文学史を書く志がなかったではない。黒川君が聴かれたのと同じく、「中国文学史」を題目とする講義を、二十年弱、京都大学でつづけた。書物にまとめたいと、筆をとりかけたことも、一度でない。そのたびに挫折した。学説に自信を欠く部分があるということのほかに、音声も著述

の内容の一部と考える私にとり、文章のリズムを私なりに整えようとする苦勞が、挫折の原因の一つであつた。

七年前、定年で大学をやめた時も、文学史を執筆すべきか、杜甫の注を書きつづけるべきか、二つの道が、多少の迷いとしてあつた。結局、後者をえらび、それをほとんど日課としている。中国の學術の伝統は、概説よりも、個体を資料としての思考の尊重にあると見うけ、それを愛しつづけて来た私としては、やはり杜甫の言語という個体と、心中したい。

といつて私は、中国文学史全体に対する管見を、人人に知ってもらいたく思わないでは、もとよりのない。今や立派な専門家である黒川君の役に立ちつづけているといえ、他の人にもそうである部分を含むとしてよい。ところでこの筆録は、そこにある見解に対し、私は責任を負う。しかし文章は、黒川君のものである。あえて便乗という語を使えば、これは便乗の機会である。またこの筆録、あるいは私の死後、本になる氣づかい、皆無ではない。同じことなら今のうちにといい氣もちも、あつた。

私は黒川君に、そのことを相談した。私としては差し支えありませんといわれ、このさいしょの講義以後、あなたの学説で新しく加わつたものを、全集から抜き出して、補注にしましょうと、いよいよ出でていよいよ奇特である。

かくてすべてを黒川君にまかせ、ここに見るような書物となつた。校正刷を二どばかり読んで、

少許の注文を発し、書き改め書き足してもらった。ということとは、内容についての責任は、あくまでも私にあるということである。私は私の見解に対し、専門家非専門家の批評を期待している。

四半世紀以前の講義を、今さら本にするのは、気がひけないでない。しかし、初写黄庭、恰到好處、そうした諺もある。初めて写かきし黄庭は、恰かも好き処に到る。

すべてを黒川君に感謝する。

一九七四昭和四十九年八月十二日。

編者まえがき

黒川 洋一

吉川幸次郎先生が京都大学において、この講義をされたのは、昭和二十三年四月から、二十五年の二月の初めにかけてである。手許にある年表をくってみると、二十三年というのは、ベルリン封鎖が行なわれた年であり、二十四年というのは、中国に人民共和国が成立した年であり、二十五年というのは、朝鮮戦争の勃発した年である。また、国内では、二十三年には戦争指導者が処刑され、二十四年には三鷹事件・松川事件、二十五年には、レッド・パーリジなどが続発している。内外ともに激動の時代であった。また、そのころは日本が敗戦にうちひしがれ、人々はただその日その日の食べ物を手に入れるのが精一杯という時代でもあった。闇物資を手に入れる手段を持たなかった私たち学生は、何を食べて生きていたのであろうか。思い出そうとしても、霧を距てて物を見るように記憶はおぼろになってしまったが、何日もほとんど何も食べないでいることが多かったという記憶だけは確かである。もちろん、お金も無かった。本を買うお金も、映画を見るお金も無かった。時には大学に通う電車賃も無かった。そうした生活の困難さが、私たちを取り巻いていたばかりではない。東洋の過去の文化は、みな無価値である。それは無価値であるばかりか、むしろ反価値的

なものばかりである、と考えられていた時代である。和漢の古い書物は、どんどんつぶされて、一山いくらで古本屋の店先に積み上げられていた。また、そうした書物を読む若者は、世間から冷笑とも憐憫ともつかぬ目をもって見られたものである。そうした中であって、ともすれば挫折しそりになる私たちを、中国の学問に繋ぎ留めたものは、吉川先生のいくつかの講義であつたと言つてよい。

当時、先生は今の人文科学研究所の前身である東方文化研究所から、京都大学に教授として移つて来られて間もないころであつたが、先生はすでにそのころ鬱然たる大家であり、その講義ははなはだ氣力と自信に満ち溢れたものであつた。そのころの大学における講義は、あらかじめ用意されたノートを先生が読まれるのを、学生は忠実に筆記するというのが普通の形であつたが、先生の講義はそうではなかつた。先生は講義のための特別なノートは用意されず、講演のような口調で講義をされたが、先生のお話は大へん明確で、少しの言葉の曖昧さも、論理の乱れもなく、お話はそのまま整然とした文章になつていた。先生は教卓の上に積み上げた唐本の山の中から一冊を取り出して、中国語で例文を読みかつ解釈されながら、忙しそうにそれを板書され、どんどんと話を進めて行かれるという具合であつたので、わたしのような初学のものには、例文を写しとるのに追われ、先生のお言葉は、その要点を記録するにとどまつた。古いノートを前にしていると、洋服の上衣の裾をチヨークの粉でまっ白にされた先生の姿や、火の氣のないま冬の教室で、オーバーの襟を立て

て講義に聞き入っていた友人たちの姿が、まさまざと昨日のことのように記憶の中に蘇ってくる。

この講義には、そうした懐しい思い出が数多くまつわるが、私がこのたびこの講義の整理を思い立ったのは、そうした個人的な思い出からのことではない。それは何よりも、この講義の内容が秀れることによる。中国文学は、「詩経」の初めより数えて、今日に至るまで、三千年という長い歴史と、ぼう大な量の作品を持つが、そのぼう大な作品を、ある一つの価値の基準をもって量り、その発展を中国民族の内面の歴史としてあとづけることは、生やさしい仕事ではない。今日に至るまで、また中国文学史というに値いする書物が書かれていないのはそのためであるが、先生のこの講義は、中国文学が世界文学の中にあつていかなる特色と価値を持つかというはつきりとした見解の上に立って、三千年の文学の展開を、中国民族の精神の歴史としての広がりをもって説き得ている。しかもその説き方は大へんに独創的である。先生はよくその年の開講に先立って、私の説こうとすることは、すべて私の頭で考えたことであり、前人の考えの上には立たない、と断言されたが、この普通講義もまたその例外ではない。この講義がいかに独創的であるかは、その引かれる例文を見ただけでも明らかである。それはありきたりの例文ではない。すべて先生が自ら発掘されたものばかりである。私がこの講義の整理を思い立ったのは、この秀れた講義を若い世代にも伝えたいと考えたためである。

しかしながら、整理にあたっては躊躇がなかったわけではない。それは私の筆録したものが、は

なはだ不完全なものであり、それによってどれだけ先生の講義の再現を果たしうるかという不安があったからである。筆録はせいぜい要点にしかすぎず、しかも先生が例文に加えられた解説は全くと言ってよいほど記録されてはいなかったのである。何人かの人と協力してまとめようかとも考えてみたが、同学の諸君のノートも私のそれと余り違いがないとすれば、意見は種々に分裂して整理は一そう困難となるであろう。よし、自分が理解した限りににおいて、自分の筆録だけを便りにして、先生の講義をまとめることにしよう。そう考えてこの仕事にとりかかったわけである。断片的に記録された言葉を繋いで、一つの文章に組み立てるために、私は古いノートを穴のあくほど見つめたと言ってよい。見つめているうちに次第に点は線となり、線と線とは論理をもって繋がって行つたが、ノートには記録されていない大切な言葉があることに気が付くことがしばしばあった。例えば、晩唐の詩のところで、先生は晩唐の詩に数字が多く出てくるのは、当時の詩人たちの不安な心が確實なものにすぎりつこうとしたことによると仰しかったと記憶するのに、それがノートのどこを探しても見当たらないのである。それはあるいは講義を聞きながら、ふと私がそう思ったことが、記憶の中で先生の言葉と混同してしまつたのかも知れない。いや、そうではない。確かにあの時に先生はそう仰しかった。そう記憶することは、それがノートに記録されていなくても、この書物の中には書き込んである。

このようにして、この書物はこしらえられたものであるが、このたび先生の古い講義を整理して

思うことは、先生の学問の早熟である。この講義を先生が行なわれたのは、先生が四十歳の半ばごろのことであるが、そのころにすでに先生の研究は中国文学史の全領域に及んでいたことを、この講義は示していると言える。先生がそれまでに発表された著書、論文はいうまでもなく、この後に発表されるおびただし著書や論文の原型が、この講義の中にはすでに含まれている。その点での講義は先生の全集の集約であると言ってよい。もちろん、この講義の後に生まれる新しい見解も数多くある。例えば、「古詩十九首」は、この講義では後漢末の建安のものとされておられるが、後の説ではそれは前漢のものである可能性を持つとされ、その理由として、その詩のもつ悲哀が漢帝国の繁栄の裏にひそむ不安の反映であることを指摘されるがごとくである。また、唐詩の優秀性を説いて、それが唐人の無限定なものへの関心から生まれており、そうした関心を唐人に生んだものは仏教の影響であったとされる説もこの講義にはまだ現われてはいないし、宋以後の詩人の増大は詩の質的稀薄を招いたが、それもまた一つの進歩であり、その点において中国近世の文学の中心はやはり詩文学に求められねばならぬとする説も、この講義には積極的な主張としては提出されていない。その点において、この講義は先生の文学史としては不十分であることを免れ得ないが、各節の終わりに先生のそれに関する著書、論文のリストをつけ、特に重大な変化のあるものには注をつけることによって、先生の文学史としての一そうの充実をはかることにした。この講義からさらに進んで、それらをお読みいただくならば、先生の巨大な学問への入門の役目をも、この書物は果た

すであらうと考える。

なお、最後に述べておかねばならぬことは、先生の講義を整理して出版することは、先生の御発意によつたものではなく、全く私の個人的な希望によつたものであることである。はじめは私の教える学生たちのために、先生の講義の荒筋だけでもまとめてごく簡単なものをと考へて出されたのであつたが、仕事をしていくうちに、それがとうとう先生の講義の可能なかぎりの復元へと進んでしまつたのであつた。数年の準備の後、このたびそれを完成して先生にそのお話を申し上げたところ、先生は私の希望をお容れ下さつたばかりではなく、岩波書店から出版していただくことになつたのは、全く予期せぬところであつた。この先生の講義が、今の若い人たちに、かつて私が受けたと同じ感動を喚び起こし、中国文学への認識を深めることができるならば、私としてはそれに増す喜びはない。最後に、元曲の例文の翻訳について、いろいろ御助言をいただいた田中謙二先生に対して深く感謝の意を表したい。

昭和四十九年三月十六日

例言

一 本書は、吉川幸次郎博士が、昭和二十三年、二十四年の両年度にわたって、京都大学文学部において講ぜられた「中国文学史」を、当時の学生であった黒川が、二十数年を経て、当時の筆録にもとづいて、それに整理を加えて成ったものである。

一 当時の筆録の整理に当たり、出来る限り先生の講義の再現に力めたが、当時の筆録が要点を記したものに過ぎなかったために、整理に際しては黒川の私意がある程度入ることは避けえなかった。また、先生の言葉で脱落したのも少なくない。従って、本書は、先生の講義そのままというよりは、黒川によって理解された限りの先生の講義であると言った方が真実に近い。

一 本書を幾つかの章節に区切って、それぞれに標題を与えたのは、先生の講義によるものではなく、また引用文の訓読や意訳も、一、二、三のものを除いては黒川の付加したものであり、先生のものではない。もし、それらに不適当なものがあれば、それはすべて黒川の責任である。

一 付録として収める「中国語の性質について」は、二十四年度の講義（宋以後）の序論として講ぜられたものの大要である。

一 各節の後に参考文献として、その節に関係する先生の論文、著書のうちの主なものを記しておいたが、そこに「全集」とあるのは、「吉川幸次郎全集」（筑摩書房）を指し、「全集補篇」とあるの

は、同全集の補篇に収められる予定のものを指し、「全集外」とあるのは、右の全集、全集補篇には収められぬものを指す。また、この講義以後における先生の説の変化については、各節の後にそのことをやや詳しく注意しておいた。

一 先生は、講義に際して、しばしば地図と年表を板書して理解を助けられたが、それらは一切本文の中には収めなかった。その代わりとして、巻末に新たに黒川の作製する地図と年表とを付しておいたので、必要に応じて参看されることを希望する。

目次

序	吉川幸次郎
編者まえがき	黒川洋一
例言	
第一章 中国文学の特色	一
第二章 中国文学史の時代区分	四
第三章 古代の文学	四九
一 「五経」	
二 戦国の散文	
三 「楚辞」の文学	
四 漢の武帝時代(一)	
五 漢の武帝時代(二)	
六 前漢後半期の文学	

目次

第四章 中世の文学(上)……………九二

一 後漢の文学

二 五言詩の成育

三 建安の社会

四 魏・晋の文学

五 東晋・宋の文学

六 齊・梁の文学

七 北朝の文学

八 南北朝の民間文学と史書など

第五章 中世の文学(下)……………一五五

一 唐代の文学

二 初唐の詩と散文

三 盛唐の大詩人たち

四 中唐の詩と散文

五 晩唐の詩と詞

六 伝奇と俗間文学

第六章 近世の文学（上）……………一九

一 北宋の詩と散文

二 北宋の詞

三 讀書人の成立

四 北宋散文の新傾向

五 口語文の発生

六 南宋の詩

七 南宋の散文

八 南宋の詞

九 金の文学

第七章 近世の文学（中）……………二七五

一 元前半期の詩

二 元の雜劇（一）

三 元の雜劇（二）

四 元の雜劇（三）

五 元の雜劇（四）